
私立探偵かじゅブーの事件簿／消えた ンを探せ！

りきてっくす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私立探偵かじゅブーの事件簿／消えた
ンを探せ！

【Zコード】

Z5306M

【作者名】

つきてつくす

【あらすじ】

俺の名はカズヤ・ブルー、通称かじゅブー。銀河をまたにかけて活躍する凄腕の私立探偵だ。ところが舞い込んでくる仕事といえば、いつも変なものばかり。ご多分に漏れず今回依頼された仕事も、性転換手術を受けたオカマさんの盗まれた
ンを探せというものだった。思いつきり気が乗らないが、これも仕事のうちと割り切つてやるしかない。俺はさっそくトレーナーのコートをはおると、アシスタンント兼ボディガードのマリモちゃんを連れて事件の調査に乗り出すのだった……。かじゅぶ先生に捧げる小説です（笑）

がんばれ、かじゅブー

心を込めて、この小説をかじゅぶ先生に贈ります……ふふつ

その女は無言で俺のオフィスの前にたたずむと、怪訝そうな顔で頭上を見上げ、足下を確認し、また上を見上げて、そしてドア越しに俺の顔をきつと睨みつけた。キヤツツアイをはめ込んだような黒目がちの瞳は、あきらかに非難の色をあらわにしている。俺は慌てて入口へ駆け寄ると、両足をふんばってその動かない自動ドアを強引にこじ開けた。

ぐきぎき……。

「や、やあ、すみません、じつは昨日からエネルギーの供給を止められ……いえ、ドアが故障しているものでして。ご不便をおかけします」

大汗をかいて愛想笑いを浮かべる俺に軽く会釈をして、女はオフィスの中へと足を踏み入れた。ヒールの高い靴がリノリウムの床をかつかつと鳴らす。タバコ臭い室内に、ふわっとシャネルのエゴイストが香った。

粗末な応接セットのソファーアームに腰掛けると、女はタイトスカートのすそから覗く太ももを持ち上げて脚を組んだ。黒い網タイツが、脚のラインの美しさをいつそう際立たせている。その脚線美をうつとりと視界の端でとらえながら、俺はそつと名刺を差し出した。

私立探偵 カズヤ・ブルーノ

「ようこそ、我が探偵事務所へ」

女は名刺には目もくれず、俺の顔をじつと見つめた。透き通るような白い肌に、エンジェルピンクの口紅が鮮烈に映えている。しか

し憂いを帶びたようなその瞳には、あきらかに苦悶の色がにじんでいた……。

俺のオフィスを訪ねてくる客は、往々にして他人に言えないような悩みを抱えていることが多い。精一杯優しい笑顔をつくり、俺は穏やかに切り出した。

「今日は、どのようなご相談でしょうか？」

女は、一瞬ためらうように目を伏せたが、しかし思い詰めたような表情で俺を見上げると、小鳥のさえずるような可愛らしい声で……いや、浪花節をうなる講釈師のようなもの凄い声で言つた。

「あて、どないしても兄ちゃんに探し出して欲しいものがおまんのや……」

俺はずつこけそになる上半身を、からりうじてイスの背もたれに預けた。美しい顔に似合わずもの凄い悪声である。いわゆるだみ声とこやつだ。大きく息を継いで気合いを入れなおすと、俺は再び営業スマイルに戻つて言つた。

「探しだしして欲しいもの、ですか？」

女が無言でうなづく。

探偵稼業をやつていると、探し物の依頼を受けることがけつこう多い。ラブホテルの化粧室に置き忘れてきた指輪、つっかり電車の網棚の上へ放置したアタッシュケース、迷子になつたまま戻らないペット、なかには我が家に先祖代々伝わる家系図を探しだしてほしい、なんていう依頼もある。俺は黒革の手帳を開きメモをとる準備をすると、彼女に言つた。

「では、その探しものとやらを教えて下さい」

すると女は表情も変えず、こともなげに言つてのけたのだった。

「あての、ポコンや」

今度こそ本当にイスの上ですつこけた。今、彼女はたしかにポコンと言つたような気がするが、俺の聞き違ひだらうか……。

「……い、今なんとおっしゃいました？」

「盗まれた、あてのポコン見つけだして欲しいつちゅうとんねん。

まさか兄ちゃん、ポコン知らんわけないやうな。あんさんのお股にもぶーらぶーらぶら下がつてまんがな」

まさか、俺をからかっているわけでもあるまい。なんだか急に関わりたくない気がしてきただが、仕方なしに訊いてみる。

「い、一応、詳しいお話を伺いましょうか。　あ、その前にお名前と……あと、そうですね、念のため性別もお願いします」

女は、白いブラウスの上からでも形の良いと分かるバストを突き出して、胸を反らせた。

「店では一応、ウェンディで通つとりま。しゃけど本名はゴンザレス・マツオカいいまんねん。性別は、そやなあ……半月ほど前まではポコン付いとつたさかいに、取りあえず男つかうことにしどきまひよか、わはは」

俺は、体中からへなへなと力が抜けてゆくを感じた。最近うちの事務所にくる依頼ときたら、こんなろくでもない仕事ばかりなのだ。

ガタゴトン、ガタゴトン、ガタゴトン、ガタゴトン
エネルギーの通わない照明器具をぎしぎし揺らして、ビルの屋上すれすれのところを星間横断列車が走り抜けていった。

女の話はこうだ。

ニユーハーフの店につとめながらお金をためて、ようやく念願の性転換手術を受けたはいいが、完全な女性になつたとたん、さっぱりお客様から指名がかからなくなつた。あえてニユーハーフの店に来るような客というのは、彼女たちの中性的な魅力に惹かれているのであって、完全な女性に変身してしまつてはもはや興味が湧かなくなるらしい。このままでは店をクビになる。そう思った彼女は、慌てて手術をしたクリニックへ駆け込んだ。五年前に施行された改正医療法により、医療機関は施術によって切り取つたペスを一定期間冷凍保存することが義務づけられていた。

ところが、いざ再び男に戻ろうという段になつて、保管されてい

るはずの彼女のペースがなくなっていることが判明した。どうやら何者かの手によって盗み出されたらしい。すぐに星間警察へ被害届を出したのだが、モノがモノだけに本気になつて捜査をしてくれる様子もなく、クリニックのほうでもすっかり諦めムードになつているというのだ。

「切り取ったポコンは、三年たつたら医療廃棄物として焼却処分されてまうらしいねん。あのクソ医者、あてにその処分されるポコンの中から好きなの選ばしたるさかい勘弁せえぬかしようた。ほんま冗談やないで。なあ兄ちゃん、あんたやつたらどないだ？ 他人の股にぶら下がつとつたもん、自分のここに付けれまつか？」

そう言つて女は黒いタイトスカートをまくり上げ、自分の股間を指さした。派手なデザインの透け透けショーツが俺の目を釘づけにする。再び男に戻るなんて……、ちょっと勿体ない気もするのだが。とりあえずこの仕事を引き受けることにした俺は、彼女から必要経費として七十万クレジットを受け取つた。思いつきり気が進まないが、金のためにはやるしかない。今月に入つてから公共料金の支払いにさえ困つていいるのだ。

「ほたら兄ちゃん、あんじょう頼んまつせー」

そう言い残して、女はそそくさと帰つていつた。

俺はさつそく出張の準備に取りかかつた。なにはともあれ、まずはその彼女のペースを紛失したという美容整形クリニックを調べてみる必要がある。携帯用の武器と替えの下着をボストンバッグに詰め込んでいると、エネルギーの供給がストップされて動かなくなつた自動ドアが、再び音を立てて開きはじめた。

ぐぎきき……。

今年の春に雇い入れた助手兼ボディガードのマリモちゃんが、買ひ物から戻ってきたのだ。最近もつともお気に入りだといつ可愛らしいメイド服を着ている。

女性、十八才。

『履歴書に記載された性別と年齢だけを見て、俺は即座に彼女を探用した……。

「マリモちゃん、出張でちょっと遠くまで行くことになったから、すぐに対応をしてくれないか」

買い物がごから取り出したカツチラーメンを棚の上に並べていたマリモちゃんは、俺のほうをふり向くと嬉しそうに瞳を輝かせ、そして胸を叩いてみせた。ウッホ、ウッホ。

学名：ピテカントロシコ＝ラフマニノフ。ペキンンドラ星系の森林自治区に多く生息する、知的類人猿の亜種だ。

ふわふわパニヒの付いたスカートからのぞく脚や、フリルで飾られたワンピースから突き出た腕には、のきなみ毛足五センチ以上の剛毛がびっしりと生え揃っている。顔は……、ゴリラとオランウータンとテナガザルを足して三で割ったような感じだ。その彼女が、表情を輝かせて言った。ウッホッホー。

やだあ、なんか久しづりの仕事つてかんじー、あたしちょー張り切っちゃうから。という意味らしい。

俺は、闇で作らせた一人分の偽造パスポートをレザーポートの内ポケットに突つ込むと、心配顔のミドリさんをウインクしてみせた。ついでに投げキッスを送る。

「悪いけどしばらく留守にするぜ、ベイビー。ちゅう」

シャコバサボテンのミドリさんは、なにも答えずただ窓辺の田だまりにたたずんで、薄桃色の花を咲かせているだけだった……。

つづく……かも

がんばれ、かじゅぶー（後書き）

お読み下さい、ありがとうございます。

かじゅぶ先生といえば、やっぱ「メーデイ」ですよね。とくに下ネタの
冴えには、他の追随を許さないものがあります（笑）

昨今、オンライン小説においても読者の対象年齢に厳しく制限がか
けられるようになりました。そんななか、ボクはかじゅぶさんと手
を取り合ひ、切磋琢磨し合いながら、なんとかぎりぎりのところへ
ストライクを投げられるよう工夫をこらしてゆきたいと考えております。
やっぱ小説面白くするには、えつちな要素も必要ですよね～。
というわけで、かじゅぶ先生、はっぴーばーすでー！ これからも
青少年の心をとりえて離さない、えっちで面白い小説を書き続けて
くださいね。

でわでわ

まけるな、かじゅブー

ワームホールの長いトンネルを抜けると雪国だった……。
いや、雪ではない。

その正体は、幾世代にも渡つて不法投棄された放射性廃棄物を宇宙バクテリアが分解するときに放つ光。宇宙空間に散りばめられたその淡い光の渦のなかを、いま超光速列車が矢のごとに通過している。

たたん、たたん、たたん
オーレット雲をたなびかせ、俺とマリモちゃんを乗せた星間横断列車は今、とある辺境の星へと近づいていた。

惑星シーメール。

もとは、オスカンドルとメスカンドルという二重惑星だったが、メスカンドルが浮氣して獅子座流星群と駆け落ちしたために重力崩壊をおこし、現在では中性子星へと変貌してしまっている。それを見たモロッコの天文学者ジョルジュ・ピュルーマン博士が、面白がってそう命名したのだ。惑星シーメール……。

雪ふらば 犬よろこびて 穴をほる

これは惑星シーメールに隠遁する、ある有名な俳諧師がうたつたもので、一年前に星間大学入試センター試験でも設問として取り上げられた有名な句である。

男の子 サオをとつたら 男の娘

これは今、俺が即興で作ったものだ。我ながら、あまり上手ではない……。

とにかく車窓の向こうは見渡す限りの雪景色であり、俺はその不思議な眺めに奇妙なセンチメンタリズムをおぼえ、込み上げてくる感情に戸惑っていた。どこか懐かしいような、それでいて新鮮な驚きにみちていいくような……。

ズボンのファスナーを開け、「こそそと股間を探る。駅の税関を抜けるときパンツのなかへ隠して持ち込んだウイスキーのポケット瓶をゆっくりと取り出す。一瞬、つんとスルメのような臭いがした。そういうえば二二二、二二二ばかり下着を替えていなかつた。おかげでツマミなしに酒を飲むことができそうだ。キャップをあけ、ひとくちだけ喉の奥へと流し込む。アルコールが胃をちりりと焼いて、さつき食べたクソ不味い駅弁を十一指腸のほうへと押しやつた。同時に体が、かあつと熱くなり、俺はぼんやりしてきた頭でもう一度、窓の外を降りしきる雪景色を見やつた。思えば遠くへ来たもんだ。というか、こんな辺鄙などじるまで性転換手術を受けにやってくる、オカマたちの気が知れない。

「ぐがつ」

頭上で、火星ブタが発情期にやるという求愛の雄叫びにも似たもの凄い音がする。さつきから意識的に聞えないふりをしているのだが、音は徐々に大きさを増していくようで、仕方なしに恐る恐る視線を上げてみる。

マリモちゃんが寝ていた。

俺の頭上、ほぼ真上あたりにマリモちゃんがいる。荷物を乗せるための網棚をハンモックがわりにして身を横たえ、大いびきをかいているのだ。

「ぐがつ、がつ、がつ、」「わわわわーっ」

どうやら彼女たちの種族というのは、外敵から身を守るために高い場所で眠る習性があるらしい。そういうれば事務所で昼寝をするときにも、わざわざ押し入れの点検口を開いて天井裏へもぐり込んでいた覚えがある。過去にそれで、一度ほど天井ボードが抜け落ちているのだ。

「ぐわわわーっ、」「わわわーっ」

推定体重はマウンテンゴリラとほぼ同じ、二百キロ。それが俺の頭のすぐ上に横たわっているのだ。冷や汗が、つうつとこめかみを伝う。網棚は彼女の体重を支えきれず、すでにフレームの一部がひ

ん曲がつてゐる。崩壊して怒濤の「」とへ落としてくるのは、もはや時間の問題かもしれない。俺はぎゅっと手をつぶり、もう一度ウイスキーをあおった。

死ぬほど席を移動したかつたが、しかし狭い車内はすでに満席だつた。

俺の正面に腰掛け、フリル付きのミニスカートをはいた乗客がこれ見よがしに足を組み替える。陶磁のように白くすべすべした太ももが持ち上げられた瞬間、ちらりと若草がのぞいた。どうやら下着を身に着けていないようだ。俺は啞然となり、そつと相手の表情を盗み見た。向こうも明らかに俺を意識しているようで、潤んだ瞳がじつとこちらを見つめていた。田を逸らし、じくじくと生睡を飲み込む……。

白い肌に、紅いルージュが鮮烈に映えていた。

小さな耳に揺れる真珠のピアス。

髪の毛の色は、鮮やかなシャンパンゴールドだった。

そして、青々とした髪の剃りあと。

オカマだった。

その隣に座る和服姿をした乗客もオカマである。そのまま隣に座る水色のチャイナドレスを着た乗客もオカマである。そのまま隣に座る……、つまりこの客車内における指定席のすべては、どの席も、どの席もオカマの姿で埋め尽くされていたのだ。ああ、早く駅に着かねえかなあ……。

ぎしづ。

頭上で、また金属のきしむ音がした。ビラやマコモちゃんが寝返りをうつたらしい。すでに網棚は大量の魚を捕らえた漁網のように深く沈み込んで、俺の頭上すれすれのところまで迫つてきている。恐ろしいことだ。俺はウイスキーをぐいっとラップ飲みすると、ふたたび現実から逃避するために窓の外を流れる風景へと視線を戻した。

ワームホールの長いトンネルを抜けると、そこは雪国だった……。

その奇妙な景色にセンチメンタリズムをおぼえた俺は、込み上げてくる懐かしさと新鮮な驚きを……隣に座るプロレスラーのようないい体をしたオカマが、心持ち体をすり寄せてきた。きれいに剃りあげたスキンヘッドに、きらきらとラメが散りばめられている。つんと腋臭が鼻をついた。ああ、早く駅に着かねえかなあ……。

「ふおつほーっ

突然、鋭く汽笛が鳴った。密車内のスピーカーから、間延びした車掌のアナウンスが聞えてくる。

「ええ、長らくのじ乗車あ、ありがとひざれこましたあ。次は終点、惑星シーメール、惑星シーメール……」

ブレーキのきしむ音がして、列車が急速にスピードを落としあじめる。けつこう乱暴な運転だ。慣性の法則で俺の体はぐんっとシートの背もたれに押しつけられた。どうじうわけか、隣のプロレスラー・オカマが俺にしなだれ掛かってくる。思わず払い除けようとしたが、けつこう体重があるらしくビクともしなかった。

「と、そのとき。

「ひきつ、きん、きん、と金属の引きちぎられる音がして、『ひざれこつ、ずすんっ！』ついに網棚が壊れ、大量の荷物とともにマリモちゃんが頭上から降ってきた。圧倒的な質量が、容赦なく俺の体を押しつぶす。

「むぎゅっ」

一瞬目の前が真っ暗になり、俺は首や手足を変な方向にねじ曲げたままの姿勢で床にへばりついた。その脇を、オカマたちは自分の荷物を手に、なにごとも無かつたかのようにすり抜けてゆく。けつこうクールな連中だ。パンティストッキングからスネ毛のはみ出しだごつい足が、何本も、何本も俺の目の前を横切つていった。

「終点、惑星シーメール、惑星シーメール、どなたさまもお忘れ物の『じやないませんよ』……」

やつと田覚めたらしいマリモちゃんが、もぞもぞと体を起こしあじめる。自分の下でぺしゃんこに潰れて伸びている俺を見ても悪び

れる様子すらない。もともと、そんな繊細な神経など持ち合わせていないのだ。うーんと両手を広げ、大きく伸びをしながら晴れやかな顔でつぶやいた。ウッホーッ。やっと着いたのねー、良かつた良かった、という意味らしい。

それは、じつちのセリフだ。

まるで、かじゅブー（後書き）

空想科学祭2011に参加する」となり、急遽更新しました
（
^_ ^）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5306m/>

私立探偵かじゅーの事件簿／消えた
ンを探せ！

2011年6月12日17時10分発行